

# 神奈川県女子師範学校附属小学校におけるプロジェクト・メソッドの導入

## —山崎博による運動会の実践を中心に—

金子知恵

### はじめに

プロジェクト・メソッドは戦前の日本の教育界においては、1920年代を中心にアメリカから移入・紹介された教育理論である。大正新教育運動の中で、東京女子高等師範学校附属小学校、奈良女子高等師範学校附属小学校、茨城県女子師範学校附属小学校などが実践への導入を行っており、本稿で取上げる神奈川県女子師範学校附属小学校（以下、附属小学校と略す）もその導入においては、先駆的かつ代表的な実践校の一つとして位置づけることができる<sup>1</sup>。

附属小学校では、当時紹介者の一人であった東京帝国大学文学部助教授の入沢宗寿（1885-1945）を通じ、入沢と個人的に親交のあった訓導山崎博（1890-1958）を中心に、修身、地理、歴史、体操、理科の諸教科の実践においてプロジェクト・メソッドが導入された<sup>2</sup>。

新教育の実践家である山崎については、この後の神奈川県橋樹郡田島町立田島尋常高等小学校における取組みがよく知られている。田島小学校では、附属小学校時代同様、入沢の研究の影響を強く受け、文化教育学を理論的基盤とする体験教育に取り組んだが、当時は全国からの注目を集め、先行研究によって紹介検討もなされている<sup>3</sup>。

山崎が附属小学校の訓導を務めたのは、1921（大正10）年3月31日から1923（大正12）年11月23日に田島小学校長として転出するまでの3年に満たない期間であり、約10年にわたる田島小学校の在職期間と比べれば短いものであった。

しかしながら、山崎の実践が入沢との交流のなかから強い影響を受けて取組まれていたものであることをふまえたならば、その基盤を築いたともいえる附属小学校での実践を検討することは重要な課題であると考えられる。

附属小学校の実践については、これまでに入江克巳の研究が取上げているのみである。入江の研究<sup>4</sup>では、「大正自由体育」の一事例として、形式的な体育教育

の批判から構想された山崎の「発育体操」論をとりあげ、体育教育の延長上に展開された運動会の実践を「児童中心主義に基づいた」ものとして評価しているものの、プロジェクト・メソッドの導入に関しては十分な考察がなされていない。

前述の通り、プロジェクト・メソッドは語教科の実践において導入されていたが、山崎がその成果を公表しているのは、『構案法に依る学校体育』（教育研究会、1923年）と入沢との共著『構案法に依る新地理教育』（教育研究会、1924年）の2点のみであり、前者において運動会の実践が紹介されている。

附属小学校におけるプロジェクト・メソッドの導入について検討するうえで、本稿においても運動会の実践に注目するが、その理由は以下の通りである。

運動会の実践は、プロジェクト・メソッドの導入にあたって、最も成果を発揮した実践であったと考えられるためである。国家による教育内容の統制下に展開された大正新教育が、教育方法の改善に比べ、内容の改善という点で大きな限界を抱えていたことは、よく指摘されるところであるが<sup>5</sup>、教科外の活動である運動会は、こうした統制からは、相対的にみて自由な領域にあり、新教育の実践が豊かに展開される条件を備えていたといえることができる。

### 1. プロジェクト・メソッドとは

まず、プロジェクト・メソッドとはいかなる教育理論なのか、アメリカにおける展開について概観し整理しておきたい。

プロジェクト・メソッドの起源は、1908年にマサチューセッツ州ノーサンプトンのスミス農業学校で開発された「ホーム・プロジェクト」と呼ばれる単元学習に求められる。「ホーム・プロジェクト」のねらいは、農業関係の科目で学習した内容と生徒の家業の農業生産とを有機的に関連づけて学習を発展させることにあったが、その後は家庭科など実技的な内容を含む教科

の学習にも適用されていった<sup>6</sup>。

「プロジェクト」による学習は、初期の導入から10年を経ずして各地に普及し、さまざまな「プロジェクト」単元が開発されたが、一般の教科教育にまで広く適用されていく過程で最も大きな影響を及ぼしたのが、キルパトリック (William H. Kilpatrick) であった。プロジェクト・メソッドといえば、しばしばキルパトリックの功績が想起されるが、彼の理論の特徴は、「『目的的活動』(purposful act)の概念で種々の単元学習の様式を統合し、その教育過程を『目的』(purposing)『計画』(planning)『実行』(executing)『判断』(judging)の4段階で定式化した<sup>7</sup>」ことにあった。

キルパトリックの論文「プロジェクト・メソッド」(1918年)は60,000部もの増刷がなされ、アメリカで広範囲に普及した。こうした普及の要因としては、この理論が、第一に、「多様な単元学習の拡大の状況と、包括的理論を求める客観的な要請」を背景として、ヘルバルト主義の単元に替わる「新しい単元の理論的モデルと定型的な構造を与える機能を果たした」こと、第二に、実践への導入を考慮したことにより、「デューイ哲学の思索と思想に共感を覚えながらも、その実践的適用に困難を感じていた、多くの教師たちをとらえた」ことが指摘されている<sup>8</sup>。

こうした普及に伴って、プロジェクト・メソッドをめぐる多種多様な見解が現れたことを日本の紹介者も理解していた。プロジェクト・メソッドは当時、松濤泰巖『全我活動の教育』(教育研究会, 1922年)、市川一郎『プロジェクト・メソッドの理論及実際』(啓文社書店, 1922年)などの著作によっても紹介されていたが、ここでは山崎博の実践に影響を与えたと思われる入沢宗寿による紹介について整理しておきたい。

入沢がプロジェクト・メソッドの研究に取り組むこととなったのは、それが東京帝国大学の吉田熊次を中心とする教育学研究室の研究課題として取上げられることになったためである。プロジェクト・メソッドの調査は、1920(大正9)年の秋頃から開始されたのだが、当時のことを吉田は次のように述べている。

私より昨今米国の教育雑誌にしばしば現はれて来るプロジェクト・メソッドと云ふのは面白い主張であるから、我国にも早晚輸入されて大流行を来すであろうと思ふことの意味を発言した。其の後色々調べて見ると、此のプロジェクト・メソッドと云ふ主張の中には種々雑多の見解があつて、用語は同一でも其の内容に於ては頗る多義であることを確めた。又それ等の主張に就いても利害得

失は一樣でないから精密に批判して取捨すべき必要があると思ふた。<sup>9</sup>

1919(大正8)年11月、教育学講座拡張に伴い、吉田の計らいによって、神宮皇学館から母校の東京帝大に助教授として着任した入沢は、こうした経緯のなかで、その調査・研究の中心的な任務を任されていた<sup>10</sup>。

後述するように、この時すでに入沢は山崎と面識をえているのであるが、プロジェクト・メソッドは、山崎という実践家を通して実践に対して直接的な関係を維持するという入沢の研究スタイルを形成する契機ともなった研究課題であった。当時、東京帝大の教育学科に在籍していた海後宗臣は入沢について次のように述懐している。

実際の教育問題を取りあげた『構案法による新地理教育』(大正一三年)は小学校で実践にあたっていた山崎博との共著であった。教育実際問題の研究には、学校で教育実践にあたっている実践家との共同研究をするという方法をとっていたのである。後にこの方法で実際研究を発表し、第一次世界大戦後に新教育運動が盛んになったときにはその指導者の一人ともなった。入沢助教授は教育思想と教育実践上の問題を担当し、教育の実践とも結びついた研究を進め東大教育学科の学風をつくる一人となっていた。<sup>11</sup>

入沢が、プロジェクト・メソッドに関して最も早い段階で言及したのは、〈表1〉にまとめたように、1920(大正9)年の論文「教育改造の諸方面」であると思われる<sup>12</sup>。これらの論文では、アメリカにおける展開について、農業教育の「ホーム・プロジェクト」にはじまり、その普及の過程で、「自己活動」一般とほぼ同義にこの概念を用いるような場合もみられるなど、様々な解釈が現れたことを紹介していた。こうした概念の拡大はあるものの、プロジェクト・メソッドの中心点はあくまでも「実際の作業、実際の企<sup>13</sup>」にあると入沢は一貫してとらえていた。

プロジェクトは身体的な活動のみならず、精神的な活動をも含むものであるがゆえに、「構案」ということが重要であるとされている。東京帝大の研究者たちの間では、プロジェクト・メソッドを日本に紹介する際に、まずいかなる和訳をあてるかが問題となったが、「実際の計画或は実際の企て」という意味を考慮して「構案」と訳したという<sup>14</sup>。

当時、「実演教授」などの和訳もあったが、それでは「案を立てる」という意味が含まれないため「構案」という訳をあてたと入沢も述べており、プロジェクト・

〈表1〉 入沢宗寿によるプロジェクト・メソッドに関する紹介記事

年	月	日	論題	掲載雑誌	巻	号	著作
1920	7	10	教育改造の諸方面	農業教育		229	
1921	1	1	米國田園学校に於ける農業教育の新方法と其の宣伝	農業教育		235	
1921	6	1	構案教授の概念の発達	帝国教育		467	
1921	6	15	マクマリーの「構案に依る教授」(一)	教育時論		1302	
1921	6	25	マクマリーの「構案に依る教授」(二)	教育時論		1303	
1921	7	5	マクマリーの「構案に依る教授」(三)	教育時論		1304	
1921	8	1	構案教授法の意義及価値	教育学術界	43	5	
1921	8	1	ストツクトンの構案作業論	帝国教育		469	
1921	12	1	「構案教授」と「作業学校」	教育論叢	6	6	
1921	12	1	最近の学校改造	帝国教育		473	
1921	12	15					教育新思潮批判
1922	3	1	構案教授の起源及び発達	教育論叢	7	3	
1922	3	1	農業教育と構案教授	教育論叢		249	
1922	5	15					新教授法原論
1923	1	28					新教育の哲学的基礎
1923	6	25					新教育方法の研究
1923	11	1	プロジェクトメソッドに就て	教育学術界	48	2	
1924	3	21					新教育法講話

(註) 教育雑誌掲載論文については、樽松かほる「入沢宗寿の研究(1)―資料・「略年譜」および「著作目録」―」『桜美林論集』第24号、1997年を参照し作成した。

メソッドの紹介において「計画」という側面が含まれることを重視していたといえる<sup>15</sup>。また、「プロジェクト」の意味を広義に解釈する場合も、狭義に限定して解釈する場合も、「目的ある活動<sup>16</sup>」ということが基本となるということを指摘していた。

## 2. 山崎博とプロジェクト・メソッド

### (1) 山崎博について

山崎博は、1890(明治23)年山梨県に生まれた。1912(明治45)年神奈川県師範学校を卒業したのちに、まず同県橘樹郡川崎尋常高等小学校において、続いて1915(大正4)年から同郡生見尾尋常小学校において訓導としての経験を積んだ。最初に赴任した川崎小学校では、「あまりに読書するので、まわりから危険視された」と山崎が回想しているように、あまり恵まれた研究環境にはなかったことが推察されるが、転出先の生見尾

小学校では、理論研究のみならず、実践に関する研究も充実していたようである<sup>17</sup>。

山崎が入沢と出会ったのは1918(大正7)年に、入沢が講師として訪れた講習会の席であった。研究熱心な青年教師であった山崎が入沢に声をかけ、以来入沢の晩年に至るまで両者の交流は続いた<sup>18</sup>。

この出会いの前後どちらの時期にあたるのかは不明であるが、山崎は同年9月28日付けで、橘樹郡内の中原小学校に着任し、20代後半という若さで同校の第4代校長となった<sup>19</sup>。翌年赴任する附属小学校以前の取組みの具体相については、これまで先行研究で言及されることがなく、山崎自身もほとんど語ることがなかったのであるが、『中原小学校60年の歩み』によれば、1920(大正9)年には「分団式動的教育を実施し、教育の実挙がる」という記述があり、同年7月には「露天学校開催<sup>20</sup>」と記されている<sup>21</sup>。同校で、山崎は訓導

と校長を兼務しており、大正新教育運動の先駆者であり、教育現場に多大な影響を及ぼしていた及川平治の理論や実践等を参照し、新教育実践にあたっていたものと推察される。

こうした経験を基礎として、1921（大正10）年3月31日以降、附属小学校訓導となり<sup>22</sup>、新たにプロジェクト・メソッドを実践へと導入することに力を注いだ。既述の通り、附属小学校赴任の前年にあたる1919（大正8）年11月には、入沢が東京帝大に着任しており、翌1920（大正9）年からはプロジェクト・メソッドの研究を開始していた。

## （2）山崎博によるプロジェクト・メソッドの理解

山崎はプロジェクト・メソッドのアメリカにおける展開をふまえ、その過程にみられた様々な主張から共通要素として次の6点の「原理」を導きだしていた<sup>23</sup>。

- 1、意識主義動機主義の教育内容を有す
- 2、自立的自動的自覚的活動を教育内容に有す
- 3、行動主義の教育内容を有す
- 4、作業による教育の内容を有す
- 5、実生活を力説す
- 6、自由個性尊重の教育内容を有す

まず、1点目と2点目の「原理」が成立する前提として児童が「目的」を意識するということが重要である。そうした「目的」は「児童自身」のものでなければならぬとするものの、一方で「教師の目的にて児童に与へられたもの」でも、「其目的を児童自身の目的とし」て「容認」した場合には「自立的自動的自覚的活動」が成り立つとされていた。

3点目の「行動主義」とは、実際に何らかの活動を行うということの意味し、4点目の「作業」とは入沢も述べていたように、心身両面からのそれを意味している。こうした「作業」に基づくプロジェクト・メソッドには、「自己活動」ということが根本的要素として含まれていると述べられていた。

5点目の「生活」とは、「児童の程度の生活」と「社会の実生活」との2つを意味し、学校教育をそうした「生活」へと近づけることが説かれていたが、前者の場合は、「児童の興味、性向、能力、素質」に合わせて教育を組織することを意味している。

6点目では、「教育者が児童の友とな」という教師の立場の転換によって、児童が「積極的に目的を確立し自己意義によつて活動し自己の個性を発現する」こと、すなわち「自由」を得ることができるとされていた。

山崎の掲げるこれらの「原理」は教育内容の問題に結び付けられている点に注意したい。プロジェクト・メソッドは、本来教育内容の改造を重要な課題として含んでいたと考えるべきであろう。

そこで重要となってくるのが、「単元」という考え方である。山崎の主張する「発育体操」においては、児童の発達に応じた教材が重視されているが、それは、従来のような方法では、「教材を過度に要求し児童の世界の意義を忘れ興味を失ふ」と考えるためである。「発育体操」の目的とは、「心身両面より体位の向上を計る」こととされ、そうした「一大単元」の中に、「直接目的としての単元」を配置すべきであるという。

山崎は、スウェーデン体操などの形式的な体操科教材を批判し、「精神方面の活動を考慮」するためには、「思考し計画する、思想的活動を比較的多くなさしめ」る教材が重要であると指摘していた<sup>24</sup>。

## 3、運動会の実践

### （1）運動会における教育課題

実践の具体相を検討する前に、運動会における教育課題が山崎によってどのように認識されていたのかを明らかにしておきたい。山崎は「従来の運動会に対する改造要点」として次の6点を指摘していた<sup>25</sup>。

- 一、一時の練習技である。
- 二、運動会遊技競技の組合せである。
- 三、商品競争である。
- 四、児童の体力考査の為の競争にしたい。
- 五、簡単な準備、簡単な器具、平常使用の器具にしたい。
- 六、御祭りの余興的の遊技競技のはぞきたい。

山崎は、運動会の実践について公表した著作『構案法による学校体育』を執筆する際、野沢正造他編『小学校における学芸会と運動会』（目黒書店、1918年）を参照しており、こうした見解は同書より示唆を受けた部分も大きいと思われる。

同書では、「運動会に於ける従来の通弊」として、「目的に対する見解の不当」、「運動会のために行なう運動会」、「運動選択の不当」、「不経済なる設備」、「結果処理の不十分」の5点があげられている。これらの結果、運動会が普段の教育活動と無関係であることや、ただ単に御祭り騒ぎに終わっていること、観客本位のものとなっていることなどが指摘されており、山崎の掲げる「改造要点」と重なる部分が多い。

佐藤秀夫は、同書を取上げて、この時期には「運動会に関して現場教員たちの『研究』もしくは反省的『検

討]が開始される<sup>26</sup>]と指摘しているが、運動会のあり方をめぐる意見は明治後期から教育雑誌上にみられる<sup>27</sup>。

そうした背景には、運動会が地域の祭礼的なイベントとして成立している実態があり、運動会における教育目的の不在が問題視されるようになっていたと考えることができる。しかし、問題状況はすぐに解消されたわけではなく、むしろその後もそのあり方が問題視されるような事態が続いていたと思われる。1928(昭和3)年の『神奈川県教育』にも、運動会を「教育的展覧会」へと改造すべきという意見が寄せられていた<sup>28</sup>。

こうした状況の下、「運動会の真使命」として山崎が掲げたのが、「教師の運動会より児童の運動会へ」の転換である。従来行われてきた「教師の運動会」とは、「教師の定めた目的で、其の目的から割出された種目、方法で限定せられた活動範囲に、観客本位の演技、あらゆる総てが客観的な一日の運動会」であったが、「児

童の運動会」では、児童自身の「自治自発の活動に訴へて」、「種目、演技は勿論のこと、予算、会場設備、準備、役割の研究考案をなさしめたい」としていた<sup>29</sup>。

児童の心身両面の発達をそのねらいとする山崎の「発育体操」においては、ただ単に身体的運動を行うのではなく、既述の通り「思考し計画する」こと、すなわち「構案」に伴う精神的活動が裏付けられているということが重要であるが、そうした活動を重視する際、運動会は格好の場面となりえた。

(2) 実践の具体相 一「大正十年度運動会」の検討—  
山崎が実践に直接関与したのは、1921(大正10)年開催の「大正十年度運動会」と1922(大正11)年開催の「大正十一年度運動会」の2回のみである<sup>30</sup>。「大正十一年度運動会」は前年度のものを参照して行われており、運動会のプログラムに関して多少の変更が見ら

〈表2〉 「大正十年度運動会の構成」

	運動会の構成	児童の活動	教師による指導
1	資料の提供		参考書、前例等の参考資料の提供および「補導」を行う。
2	第1回学級会議	種類に関する「学級成案」を作成する。	
3	第1回代表者会議	5年生以上の各学級正副男女一名ずつを構成員として代表者会議を開き「学級成案」を検討する。	
4	職員批評と補導		代表者会議の結果を検討した後、「補導事項」を再び提示し「補導」を行う。
5	第2回学級会議	項目に関する「学級成案」を再び作成する。	
6	第2回代表者会議	「学級成案」を検討する。	
7	試演会	各学級で代表者を中心に試演会を行い種目に関する調整を行う。	必要に応じて「補導」を行う。
8	第3回代表者会議	試演会の結果に基づきプログラムを確定する。	運動会の内容形式と構成に対する要領を作成し発表する。
9	第4回代表者会議	保護者会からの150円を収入として予算を作成する。	
10	第5回代表者会議	各係の設置、会場の設備について話し合う。	
11	各係別打合せ	呼出係、準備係、指揮係、審判係、記録係、相互監、衛生係、接待係の各係ごとに話し合いを行う。	

(註) 山崎博「構案法に依る学校体育」教育研究会、1923年、202-208頁より作成した。

れるのみであるため、本稿では前述の「構案法による学校体育」所収の「大正十年度運動会」<sup>31</sup>の記述を通して実践の具体相を検討したい。

〈表2〉は、「大正十年度運動会の構成」とその内容について、児童の活動と教師による指導とに注目してまとめたものであるが、以下、児童による「構案」がいかなるものであったのか、また、教師による「補導」とはいかなるものであったのかを検討していきたい。

まず、最初の段階の指導において重要なのは「児童の自治心、自覚心に訴へて活動即ち有目的活動、自意的計画的な活動により構案させ<sup>32</sup>」るとされているように、以下の「指導要項」の1点目にあげられている「運動会の目的」を児童に自覚させることである。

「指導要項」

- 1、運動会の目的
- 2、種目選定標準
- 3、演技内容
- 4、学級会議、代表者会議開催決定のこと
- 5、代表者会議にて決定すべき事項  
運動会の要素、実演時間と種目決定数、運動の要領と採否、役割人員の決定、役割決定、予算作製<sup>33</sup>

指導に関するこれ以上具体的な内容については記されていないが、前節でみた山崎による運動会の「改造要点」と結びつけて、これらの点に関連した資料を提供し、「補導」したものと思われる。最初の「目的」の自覚の段階を基礎として、次の「計画」段階が組み込まれ、児童による「学級会議」「代表者会議」などの「会議」が何度も重ねられている。

教師による「補導」の結果、各学級で考案された「学級成案」は〈表3〉に示す通りである。この結果を見て山崎は「教師本位の余弊を痛切に感じ」たというが<sup>34</sup>、それは前節でみたように、山崎が従来の運動会の問題点としてあげる「平素は少しも用いられて居」ない「ダルマ何々云々」を使用するような種目やお祭りのな「仕度競争」などが含まれていること、「学年発達即ち心身発育の程度」が考慮されていないことであると思われる<sup>35</sup>。

〈表3〉の「学級成案」は、第一回代表者会議での検討結果を経たのち、職員会で議論され、教師からは次のような「補導事項」を作成し、再び児童にその内容を提示した。

- イ、ボール使用技を使用せしむること
- ロ、リレーレースを各級に組入れること
- ハ、標準想定の設定方について

〈表3〉 「学級成案」

尋一	ダルマ送り、破鈴、旗渡し、徒競走、旗と輪の交換
尋二	綱引、徒競走、トンネルボール、帽子取り、リレーレース
尋三	デットボール、綱引、徒競走、伝書鳩、マリツキ送り、飛行機破り
尋四	リレーレース、擬戦、徒競走、飛越台、マラソン、二人三脚、雨の降る日、生花競走
尋五	(男) 擬戦、騎馬戦、マスト倒し (女) 綱引、行進遊戯、タスキ取、二人三脚 (男) 擬戦、騎馬戦、マスト倒し
尋六	(男女) リレーレース、徒競走、フットボール
高男	ホップステップエンドジャンプ、キックボール、リレーレース、旗倒し、二人三脚、ハードルレース、徒競走
高女	体操、行進遊戯二回、リレーレース、大演習、旅は道連れ世は情け、スプーンレース

(註) 山崎, 前掲書, 203-204頁より作成した。

標準想定の意義及積極的方面の設定方を説明し自覚を促したのである。そして研究をさせる事とした。

二、各運動の内容形式方面を発展的に定めること各学年に運動を分類して其の内容形式すべてを発展的に研究すべきを示した。<sup>36</sup>

「イ」、「ロ」は、「教育的」観点から意義あるものと判断されたため、新たな種目の要求がなされ、「ハ」、「ニ」では、児童自身が種目に関して「研究」すべき事項が提示されている。この「補導事項」に基づき、再び「第二回学級会議」「第二回代表者会議」を重ねて、運動会の種目が修正・仮決定され、試演会が行われた。さらに、その結果が「第三回代表者会議」にかけられて最終的な種目が決定していくのであるが、〈表4〉が「大正十年度運動会」のプログラムとして作成された「第八回体育奨励会運動番組」である。

プログラムの最後には参観者に向けて次のような説明書きが添えられていた。

〈表4〉 「第八回体育奨励会運動番組」

1	源平球入競走	尋一	28	リレイレース	尋四
2	ポテトレース	尋二	29	リレイレース	尋五
3	走り幅跳	尋三	30	五〇米競走	尋一
4	○ 共さがし競走	尋四	31	七五米競走	尋二
5	二人三脚	尋五	32	一〇〇米競走	尋三
6	百米細跳競走	尋六	33	一五〇米競走	尋四
7	槍投	高女	34	○ 大原女	高女
8	ランニングホップステツプエ ンドジャンプ	高男	35	砲丸投	高男
			36	体操	尋四男
9	子ーる渡*	尋一	37	体操	尋五女
10	追入ボール	尋二	38	体操	高女
11	○ ボール投	尋三	39	デツトボール	尋六
12	デツトボール	尋四	40	ストライクボール	高女
13	一七五米競走	尋五	41	キツクボール	高男
14	二〇〇米競走	尋六	42	○ 伝書鳩	尋三
15	二〇〇米競走	高女	43	旗立競走	尋五
16	二五〇米競走	高男	44	○ 源平合戦	尋六男
17	擬戦	尋三四	45	異境の月	高女
18	擬戦	尋五六高一女	46	ハードルレース	高男
19	帽子取	尋五六高一男	47	リレイレース	師選
20	桃太郎	尋一	48	ドリプリングリレイ	尋五
21	浦島太郎	尋二	49	○ 蟲の楽隊	尋三四女
22	秋の光	尋六女	50	○ 笛と太鼓	尋二
23	お祝	高女	51	○ 汽車, 独楽	尋一
24	○ 爆弾	高男	52	リレイレース	職員教生
25	○ 跳躍棒取	尋六	53	リレイレース	尋六
26	綱引	師全	54	リレイレース	高女
27	リレイレース	尋三	55	リレイレース	高男

(註) 山崎, 前掲書, 219-221頁より作成した。

\* のついている種目は「ボール渡」の誤記と思われる。

ご参考までに

この運動会は左の事項を指示して児童に構案させたものであります。

運動会の目的, 要素, 時間, 経費  
各学級の児童代表はその意見を纏めて十数回会合

して構案いたしましたそれを教師が補導して出来上がったものであります。

この他にも, 児童の発達程度を考慮して種目を選定し, プログラム上に同種の競技を学年順に配当していくことで, 発達段階を可視化したことや, 三学年以上

の丸印のついた種目は「児童の構案を補導した」創作的なものであるということなどが説明されていた<sup>37</sup>。

その後、「第四回代表者会議」で予算案を作成し<sup>38</sup>、「第五回代表者会議」では、各係の設置や、当日の運営をみすえた「役割研究」がなされていた<sup>39</sup>。こうした「役割」は高学年以上の児童に割り当てられ、運動会前の準備係、当日の運営係、終了後の整理係に大別した後、さらに次のように細かい割り当てがなされ、児童自身による運営が図られていたことをうかがうことができる。

運動会前の準備係は以下の通りである。

- 一、運動準備係 器具作成整理係  
会場設計構成係  
プログラム設計係
- 二、庶務係 案内状、招待状、賞品、記録係
- 三、会計係

当日の運営係は以下の通りである。

- 一、総務係
- 二、運動係、呼出係、準備係、指揮係、審判係、賞品係、
- 三、庶務係、記録係、相互監督係
- 四、衛生係
- 五、接待係

運動会後の整理係については記されていないが、各係数人ずつを割り当て、それぞれを訓導もしくは教生が受け持つ形をとっていた。

こうした「計画」にもとづき、当日の運動会が「実行」された。終了後には、来年度の実践のための資料ともなり、また今年度の反省資料ともなるため、各学級、代表者、教師それぞれにおいて「反省批判」することが重要なプロセスとして位置づけられていた。

おわりに

本稿では、附属小学校におけるプロジェクト・メソッドの導入において中心的な役割を果たした山崎博に注目し、山崎がプロジェクト・メソッドをいかに理解していたのか、また運動会にたいしていかなる教育課題を抱いていたのかを明らかにしたうえで、プロジェクト・メソッドが導入された実践の具体相について考察した。その結果以下のことが指摘できるであろう。

第一に、3章で明らかにしたように、この実践はプロジェクト・メソッドの特徴のひとつである「目的」、「計画」、「実行」、「判断」という一連のプロセスにおいて構成されていたとみることができる。その際、最

も中心的であり、重視された部分は、児童が何度も「会議」を重ねていた「計画」の段階であると考えられる。それは、山崎による実践資料の記述の大半がこの段階に関するものであることから裏付けることができる。

教師による「補導」を交えながら、児童が「計画」し、それに基づき「実行」というプロセスは、入沢のいう「構案」、すなわち「実際の作業、実際の企」ということを意味している。

プロジェクト・メソッドの導入によって構成されたこの実践においては、大正新教育運動においてしばしば掲げられた「自己活動」という中心的な概念が実践において具体的にくみこまれていたということをもよみとることができる。

また、そのような意味づけの前提にあるべき「目的」の自覚についてはどうであろうか。「目的」の自覚の段階に続く「計画」の段階で話し合うべき「内容」が、どれほど具体的に明示されたかは不明なもの、「指導要項」の内容から判断しても、枠組みは教師の側すでに用意されていたものと思われる。この点に関していえば、2章で言及したように、山崎は「教師の目的」でも児童がそれを「容認」すればよしとしていたのであった。会議や当日の運動会を運営するのは児童自身であるが、「目的」自体は教師によって提示された部分が大きかったと思われる。

第二に、運動会は山崎が主張する「発育体操」における「一単元」として、体育教育の向上をめざす機会として位置づけられていたことである。「発育体操」においては、「構案」に基づく心身両面の活動が重視されており、そうした観点から考えた場合、運動会は格好の機会であったと考えられる。

ここでは、教科外活動を教科教育と関連づけることによる教科課程の充実が目指されているが、山崎の場合、そうした関連づけは体育教育においていかなる意義をもつのかという観点に重点が置かれていた<sup>40</sup>。

また、プロジェクト・メソッドの導入がもたらした結果として、山崎は、地域における祭礼的なイベントから教育の成果を発表する場へと運動会の意味の転換を目指していたと考えることができる。山崎に限らず、運動会における教育目的が問題となったとき、教育界の風潮としては、しばしば体育教育との関連づけによりその意義付けを行うという傾向もみられたようである<sup>41</sup>。

「運動会は決して体育の為のものにあらず観客を喜ばしむるを目的の第一となす 大に派手にやる事結構なり」<sup>42</sup>などの認識も一方にあるなかで、山崎はこうし



た形で運動会を改造しようとした。

- 1 東京女子高等師範附属小学校では、北沢種一、藤井利普を中心に「実演教授」として、奈良女子高等師範学校附属小学校では、日本に紹介した松濤泰蔵の邦訳によって「全我活動の教育」という名称のもとに導入されていた。茨城県女子師範学校附属小学校への導入については入沢が言及している。藤原喜代蔵によれば、東京女高師附属小学校の北沢種一らは、帝大派に対抗して「実演法」という和訳をとったとされている(藤原「明治大正昭和 教育思想学説人物史」第3巻、東亜政経社、1943年)。
- 2 山崎博「入沢先生の追想」『教育学研究』第14巻第1号、1946年。
- 3 主な研究としては以下のものがあげられる。小原国芳編『日本新教育百年史』玉川大学出版部、1970年(第1巻「山崎一人と体験教育」、第2巻「神奈川県田島小学校の体験教育」)。谷口雅子「大正時代の体験学校」『福岡教育大学教育学部紀要』第33巻、1983年。影山清四郎「戦前の田島小学校における体験教育について」『横浜国立大学人文紀要』第1類、哲学・社会科学、第31輯、1985年。
- 4 入江克巳「大正自由体育の研究」不味堂出版、1993年、214-215頁。
- 5 中野光「大正自由教育の研究」黎明書房、1968年、他。
- 6 細谷俊夫『教育方法』、岩波全書、1960年、35頁。
- 7 佐藤学「米国カリキュラム改造史研究」東京大学出版会、1990年、122頁。
- 8 同上書、148-149頁。
- 9 吉田熊次『最近教育思潮』教育研究会、1923年、111頁。
- 10 同上書、112頁には「入沢助教をして専らその任に當つてもらつた」と述べられている。
- 11 海後宗臣『教育学五十年』評論社、1971年、37頁。
- 12 唐沢富太郎編『教育人物事典』上巻における入沢の項目を谷口雅子が執筆しているが、そこでは「プロジェクト・メソッドについては、大正一〇(一九二一)年に雑誌『教育思潮研究』に、翌年五月に「新教授法原論」に紹介し、山崎博がそれに関心をもち入沢を訪れて教を請うたところから田島体験学校の実践が芽生えることとなった」と述べられている。谷口は「大正時代の体験学校」においても同様の記述をしているが、これは1933年発行の雑誌『教育』第2巻第1号掲

載の入沢による回想「私と私の教育学の生ひ立ち」の中に、1921年の著作『教育新思潮批判』においてプロジェクト・メソッドについて「詳述した」という記述がなされている箇所を誤読したものと思われる。なお入沢と山崎の出会いは本稿第2章でも言及しているように1918年である。

- 13 入沢宗寿「プロジェクトメソッドに就て」『教育学術界』第48巻第2号、1923年。
- 14 同上。
- 15 同上。
- 16 入沢「『構案教授』と『作業学校』」『教育論叢』第6巻第6号、1921年。
- 17 山崎博「私を語る」『神奈川県教育』261号、1929年。
- 18 山崎博「入沢先生の追想」『教育学研究』第14巻第1号、1946年。同史料では、「川崎市」における講習会の席で出会ったとされているが、当時まだ川崎市は成立していない。橘樹那の誤りであると思われる。
- 19 川崎市立中原小学校『60年のあゆみ』1961年。
- 20 山崎は1920年9月発行の雑誌『小学校』第29巻第13号に「露天教育の実際」という一文を発表している。
- 21 前掲、註19)書。同資料は、同校の歴史を年表にまとめた謄写版刷りの簡易な学校沿革誌であり、その詳細を知ることにはできない。
- 22 同上書によれば、1921年3月31日には第五代校長が着任しているため、附小には年度始めからの勤務であった。
- 23 山崎博「構案法に依る学校体育」教育研究会、1923年、65-71頁。
- 24 同上書、71-75頁。以下断りのない限りこの範囲より引用する。
- 25 同上書、194-199頁。以下断りのない限りこの範囲より引用する。
- 26 佐藤秀夫編『日本の教育課題5—学校行事を見直す—』東京法令、2002年、251頁。
- 27 島根県女子師範学校教諭中沢新助は「本邦学校運動会の変遷を記し将来の方法に及ぶ」と題して、明治40年以降の運動会には、「平素教育の練習を以て目的とし、教育中心」となる動向が見られるようになったと述べている。『教育時論』1100号、1915年。
- 28 青木寅「運動会に就いての一考察」『神奈川県教育』第251号、1928年。
- 29 山崎、前掲書、199-200頁。
- 30 1923年9月1日には関東大震災があったため、「大正十二年度」運動会は開催されなかったのではないかと思われる。

<sup>31</sup> この実践資料は山崎が分析、分割しながら用いたものである。

<sup>32</sup> 山崎，前掲書，202頁。

<sup>33</sup> 同上書，202-203頁。

<sup>34</sup> 同上書，203頁。

<sup>35</sup> 同上書，194-199頁。

<sup>36</sup> 同上書，205-206頁。

<sup>37</sup> 同上書，221-222頁。

<sup>38</sup> 予算案は160円で立てられている。鎌倉市教育委員会『鎌倉教育史』1974年，168頁には，1911年に鎌倉小学校で開催された運動会の様子が記載されているが，そこには，当時の小学校長の給料が25円であるなか，運動会への寄付金は369円，支出は326円であったことが

記されている。

<sup>39</sup> 山崎，前掲書，240-248頁。以下断りが無い限りこの範囲より引用する。

<sup>40</sup> この点に関連して，野村芳兵衛の場合は，運動会に独自の教育的意義を見いだしていたと思われる。新教育の課題認識や取組みについては今後調査を進めたい。野村による教科外活動の実践については，水崎富美「野村芳兵衛の『訓練』と教科外活動の実際」『東京大学大学院教育学研究科教育学研究室紀要』第28号において検討されている。

<sup>41</sup> たとえば，註28)の青木がこうした主張を行っている。

<sup>42</sup> 前掲註38) 書，169頁。

## Introduction of the Project Method into the Practice in the Elementary School Attached to Kanagawa Women's Normal School

--Focusing on the Practice of the Athletic Meeting ("Undōkai") by Hiroshi Yamazaki--

Chie Kaneko

The Project Method was imported to Japan in 1920's. In the age of the movement of "Taishō-Shinkyōiku" (The New Education), Several elementary schools attached to Normal Schools tried to introduce this theory into the practice. The elementary school attached to Kanagawa Women's Normal School. was one of the representatives which tried to do it. In this school, the practice of the Project Method was started in 1921 by Hiroshi Yamazaki, influenced by the theoretical study of Sōju Irisawa, associate professor at Tokyo Imperial University.

The purpose of this paper is to investigate the introduction of the Project Method into the practice of the Athletic Meeting ("Undōkai") at this school. The reason why this paper focuses on it is as follows,

It is known that "Taisyō-Shinkyōiku (New Education) movement had the limit of the curriculum development under the national government control. Although the Athletic Meeting ("Undōkai"), an extra curricular activity was supposed to be relatively free from it.

As a conclusion, this paper points out that the practice was constructed of four steps, purposing, planning, excuting, judging by introducing the Project-Method. The planning process was regarded the most important. Children repeated the meetings over and over.